所収教科書解題……二六

尋常小學讀本　卷一―卷十二

（第二期　国定国語教科書）

平式　旗　御細　右　身　老

垣　千　質素　御製　外　幸

参拜あらせられ、平和の成りたるを告げたまひしが、その御式の盛なること前古たぐひなかりきと申す。

第二　參宮日記の一節

十月十七日　晴　雨は夜中にはれて、今日はうらゝかなる天氣なり。家々に日の丸の旗を立てたり。八時宿を出でて、町を南へ行けば、宇治橋のたもとにいたる。このあたり御山木細工・貝細工などを賣る店多し。五十鈴川は流早くして、水清らかなり。橋を渡りて神苑に入る。廣き道の左右に梅・松・櫻などを植ゑたり。明治二十七八年及び三十七八年戰役の戰利品たる大砲、日本海海戰の記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。

これより少し進めば、數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高く天をつく。その神々しさいはん方なし。五十鈴川の水に口すゝぎ手洗ひて左へ行き、神樂殿・御馬屋の前を通り、御宮の前にいたる。そこの御門を板垣御門といふ。板垣御門を入りて、玉垣御門の前にて拜し奉る。御垣の内をうかゞひ奉れば、神殿の御屋根はかやにてふき、棟にはかつを木をならべ、兩はしに千木をうちちがへたり。材は皆ひのきの白木を用ひ、金色の金物きら〳〵と日にかゞやけり。その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、かへつてかしこく、かたじけなし。

とこしへに民安かれといのるなる、
　我が世を守れ、伊勢の大神。

の御製を思ひ出でて、我が國體のたふとさ、いよいよ身にしみておぼゆ。

宿に歸りて一休みの後、外宮に參拜す。神殿の御有樣、おほよそ内宮に同じと見奉る。今日は神嘗祭なれば、夕方には内宮へ勅使の參拜もあるべしといふ。今日のこの日に年來ののぞみを達したるは何等の幸ぞや。

第三　たけがり

秋の日の空すみわたり、
風暖にさてもよき日や。
山遊びするによき日や。」

友よ、來よ。手かごを持ちて、

路　呼　寫過

伯母　返　實　髮　參

いざ、裏山にきのこたづねん。
　山深く行きてたづねん。」

たどり行く細路づたひ、
はや、かうばしくきのこにほへり。
山風にきのこかをれり。」

うれし、この松の根もとに、
まづ見つけつと高く呼ぶ聲。
　やまびこにひゞく呼聲。」

いでや、あの岩の小かげに、
皆うちよりてえもの數へん。
たけがりのいさをくらべん。」

第四　寫眞をおくる手紙

この間にいさんがかへつて來ましたので、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。ついでに私一人のもとりましたから、兩方一枚づつ差上げます。三郎はいつもにこ〳〵してゐますから、寫眞でも笑つて寫つてゐます。私もみんなと一しよの分はまじめになり過ぎましたので、にいさんによそ行の顏だといつて笑はれました。一人の分はうつかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。伯母樣お笑ひになつてはいけませんよ。

十一月五日　　はな
伯母上樣

同じく返事

御寫眞ありがたう。よく寫つてゐるので、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。三郎さんは實にかはいらしく寫りました。おはなさんも一人の分はほんとによく寫つてゐます。なるほど皆さんと一しよの分は、おはなさんも次郎さんも少しまじめになつてゐます。おはなさんはしばらく見ないうちに、髮が大そうきれいになりました。段々おかあさんに以て來ます。この寫眞で見ると、おかあさんの小さい時分にそつくりです。寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなりました。その内參りませう。皆さんによろしく。

十一月八日　　伯母より
おはなさま

小學國語讀本　卷一～卷六

（第四期　国定国語教科書）

橋　米粮

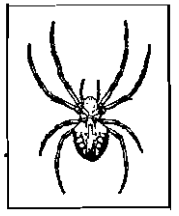
川舟が靜かに通る。
舟のかげ、人のかげ、
人の持つさをのかげ、
ゆら〳〵、ゆら〳〵。

ごう〳〵と音たてて、
汽車が行く鐵橋の
かげも、また水の上、
ゆら〳〵、ゆら〳〵。

十七　クモノス　柿傳

二階ノマドカラ眺メテ居ルト、大キナ鬼グモガ一匹、スウツト、私ノ目ノ前ニブラ下ツテ來マシタ。私ハ、ビツクリシマシタ。

見ルト、クモハ、雨ドヒノ所カラ、絲ヲ引イテ下リテ來タノデス。サウシテ、ソノマヽジツトシテ。動カウトモシマセン。コレカラ、一タイ、何ヲシヨウトスルノカト思フト、私ハ、急ニオモシロクナツテ來マシタ。



クモハ、ヤガテ、後ノ方ノ足ヲ動カシテ、オシリノ所カラ、タクサンノ細イ絲ヲ引出シ始メマシタ。絲ハ、一糎、二糎ト、見ル間ニノビテ、二米グラヰニモナリマシタ。何十本トモ知レナイ、細イ、白イ絲ガ、夕風ニユラレナガラ、フハフハト空中ニタヾヨツテ居ルノハ、ホンタウニキレイデシタ。

ソノウチニ、コノタクサンノ絲ノ中ノ一本ガ、向カフノ柿ノ木ノ枝ニクツツキマシタ。クモニハ、ソレガ、スグワカルモノト見エテ、シキリニ、コノ絲ヲ引ツバツタリ、動カシタリシテ居マシタガ、ヤガテ、ソレヲ傳ハツテ向カフヘ渡リ始メマシタ。サウシテ、風ニユラレナガラ、ヤツト柿ノ木ニタドリ着キマシタ。クモハ、ホツト一安心シタヤウデシタ。

今度ハ、前ノ方ノ足ヲシキリニ動カシテ、コノ絲ヲ自分ノ方ヘタグリ始メマシタ。スルト、今マデタルンデ居タ絲ガ、ダン〳〵ニ、マツスグ

夏　桐僕

ニナリマシタ。カウシテ、雨ドヒト柿ノ木トノ間ニ、一スヂノ絲ガ、空中ニピントハリ渡サレマシタ。

クモハ、コノ上ヲ、イソガシサウニ行ツタリ來タリシテ、スヲ作ル仕事ヲ續ケマシタ。

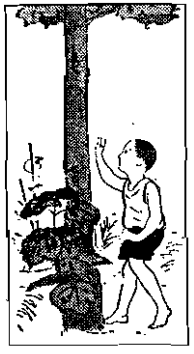
私ハ、クモノチエノアルノニ、スツカリ感心シテシマヒマシタ。

晩ニナツテ又行ツテ見マスト、ソコニハ、モウ、リツパナクモノアミガ出來テ居マシタ。

十八　夏の午後　井　暑　益蟲

「じいつ。」と、せみが鳴き出した。

僕は、はだしで庭へ出た。せみは、桐の木で鳴いて居る。そつと行つて見ると、二米ぐらゐの高さの所に、あぶらぜみが一匹止つて居る。背のびして、手をのばしてみたが、だめだ。僕の手先よりは、四十糎も高い。取れないと思ふとくやしくなつて、木のみきをとんとたゝく。せみは、びつくりしたやうに、「じ



じ。」と聲をたてて、とんで行つた。

井戸ばたへ行つて、足を洗つた。ざあつと、つめたい水をかけると、いゝ氣持だ。下駄をはいて、うらの畠へ行つてみる。

なすも、きうりも、みんな暑さうにぐつたりして居る。きうりにそへて立ててある竹に、とんぼが止つたり、はなれたりして居る。せみの代りに、あれを取らうか。いや、とんぼは益蟲だから、取らない方がよいと、先生がおつしやつた。

畠のすみの日まはりは、暑い日を一ぱい受けて、夏はおれの世界だといふやうな顔をして、三つ咲いて居る。今では、僕よりもずつと背が高いが、これも僕が植ゑたのだと思ふと、何だかはいゝ氣がする。

誰　顔咲

暑い、暑い。うちへかへつて、えんがはに腰をかけて居ると、川で、誰かあそんで居るらし

6

帽　　日記　晴曜　起　　涼　木

い。たのしさうな聲が聞えて來る。さうだ、僕も行つてみよう。

「おかあさん、川へ行つてもようございますか。」

と、大きな聲で聞いてみると、

「行つてもいゝが、あぶないから、よく氣をつけなさいよ。」

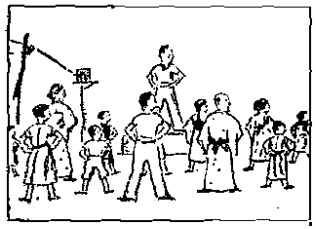
と、あちらの部屋で、おかあさんの聲がした。

僕は、帽子をかぶつて、一もくさんに走つて行つた。

十九　日記

八月一日　木曜　晴

けふから夏休だ。ラヂオ體操に行くので、朝は五時半に起きた。まだ早いつもりで學校へ行つたら、もう大ぜい來て居た。あしたからは、もつと早く來ようと思つた。



朝御飯がすんでから、少し勉強をした。休中は、毎朝、涼しいうちに勉強するつもりだ。

八月二日　木曜　晴

砲　　雷　　東　丈

けさは、五時に起きて、ラヂオ體操に行つた。僕が三番目だつた。

勉強がすんでから、草むしりのお手傳をした。午後、中村君が來た。二人で、水鐵砲をこしらへてあそんだ。

八月三日　金曜　晴、夕立

東京のをばさんが、春子ちやんを連れて、お出でになつた。おみやげに、おもしろい本をもらつた。

午後二時頃、ひどい夕立が降つて來た。おざしきでねて居た春子ちやんが、雷の音で目をさまして、わつと泣出した。

八月四日　土曜　晴、後くもり

一郎さんから、はがきが來た。

暑いことですね。皆さん、おかはりはありませんか。こちらは、皆、丈夫です。私は、にいさんと、毎日、川へ泳ぎに行きます。この

來

頃、少し泳げるやうになつて、うれしくてたまりません。どうか、をぢさんや、をばさんによろしく。

と書いてあつた。

このはがきを、おとうさんがごらんになつて、

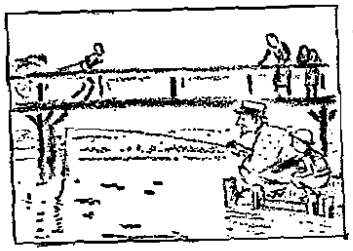
「一郎は、なか〳〵字がうまくなつた。お前も、負けないやうにしなければいけないね。」

とおつしやつた。

けふも、午後、夕立が來さうになつたが、とうとう降らなかつた。

八月五日　日曜　晴

一郎さんに返事を出した。



おはがきありがたう。皆さん、御丈夫ださうで、けつこうです。

こちらも、みんな元氣です。君は、泳げるやうになつたさうですね。僕も、來年から、泳を始めようと思つて居ます。をとゝひから、東京のを

釣

ばさんが、春子ちやんを連れて、來て居ます。皆さんによろしく。

夕方、ねえさんと二人で、庭に水をまいた。

八月六日　月曜　晴

午後、おぢいさんが、さかな釣りに行かれるので、僕もついて行つた。廣田川をだん〳〵とさかのぼつて、朝日橋のそばまで行つた。ずゐぶん、たくさん釣れた。かぞへて見たら、三十二匹あつた。

二十　こほろぎ

かべのわれ目で、
こほろぎが、
ころ、ころ、ころ、ころ、
鳴いて居る。
靜かな、靜かな家の中、
ころ、ころ、ころ、ころ、ひどく聲。

そつとあかりを
近寄せて、
のぞいて見れば、
長いひげ、
黑い頭と目が光る。

書　祈

光盛の娘は、其の後、晝夜頼朝をねらひましたが、少しもすきがありません。かへつて、はだ身はなさず持つて居た刀を見つけられてしまひました。其の刀に見おぼえがあつた頼朝は、さあ、此の女にはゆだんが出來ぬといふので、石のらうに入れてしまひました。唐絲といふのは此の女のことでした。

唐絲には、其の時十二になる娘がありました。それが萬壽姫で、木曾に住んで居りましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばを連れて鎌倉をさして上りました。二人は野を過ぎ山を越え、なれない道を一月餘りも歩き續けて、やうやく鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へ參つて、母の命を助け給へと祈り、それから頼朝の御殿へ上つて、うばと二人でお仕へしたいと願ひ出ました。かげひなたなく働く上に、人の仕事まで引受けるやうにしたので、萬壽々々と、人々にかはいがられました。

さて萬壽は、誰か母のうはさをする者は無いかと氣をつけて居ましたが、十日たつても二十日たつても、母の名を言ふ者はありません。あゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、力を落して居ました。

或日の事、萬壽が御殿の裏へ出て、何の氣もなくあたりを眺めて居ますと、小さい門がありました。そこへ下仕の女が來て、「あの門の中へ、はいつてはなりませぬ。」と申しました。わけを尋ねますと、

「あの中には石のらうがあつて、唐絲樣が押込められて居ます。」

と答へました。これを聞いた萬壽の驚と喜は、どんなであつたでせう。

それから間もなくの事です。或日、今日はお花見といふので、御殿は人ずくなでした。萬壽は、其の夜ひそかにうばを連れて、石のらうをたづねました。八幡樣のお引合はせか、門の戸は細めにあいて居りました。うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中にはいりました。月の光にすかして、あちらこちら探しますと、松林の中に石のらうがありました。

孝

た。萬壽がかけよつて、らうのとびらに手をかけますと、「誰か。」と、らうの中から申しました。萬壽は格子の間から手を入れて、

「おなつかしや、母上樣。木曾の萬壽でございます。」

「何、萬壽。木曾の萬壽か。」

親子は手を取合つて泣きました。やがて、うばをも呼んで、三人は其の夜を涙の中に明かしました。

これから後、萬壽はうばと心を合はせ、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。さうして、其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでした。

親を思ふ孝子の心には、頼朝も感心して、石のらうから唐絲を出してやりました。二人が互に取りすがつて、嬉し泣きに泣いた時には、頼朝を始め居合はせた者に、誰一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

頼朝は唐絲をゆるした上に、萬壽にはたくさんのはうびを與へました。さうして、親子はうばもろともに、喜び勇んで木曾へ歸りました。

秋　眞南　穀脱　痛快　陽太

第八　晩秋

朝は霜だ。屋根も、垣根も、小道も、小道に落散つた木の葉も、眞白である。

空は眞青にすんで、朝日がやがて野ら一面を明かるくする。

けたゝましく、もずが鳴く。

たんぼはもうなかば以上刈取られて、おくてだけが、こゝかしこに殘つてゐる。さうして、霜の消える頃から、組合の脱穀機の音が、あたりの靜かさを破つて景氣よく聞えて來る。

村でこれ程痛快な仕事があらうか。耕して、植ゑて、刈つて、干すまで、ほとんど一本一本手にかけた稲が、此の機械で見る〳〵片附けられて行く。稲かけから運ばれた稲束の山が、片端からへつて、後には藁の山が積まれ、前にはかき出されたもみが、黄金の小山をきづく。

朝の霜も忘れたやうに、眞晝の太陽が輝いて、日なたに敷いたむしろの上には、猫がぽかぽかと暖

8

梢　實　根　菜　　演

さうに眠つてゐる。道端の枯れた草むらの底から、かすかに、ごくかすかに、蟲の音が聞えるやうに思ふのは、空耳であらうか。大ていの物は枯れて茶色になつてゐる中に、梢にすゞなりの柿が、赤々と照つてゐる。ゆずの實が、みづ〳〵しく金色に輝いてゐる。大根や菜種の葉の緑が、生き生きと畠に續いてゐる。

午後になると、間もなくうすら寒くなる。長く黒く引く物のかげが次第にうすれて、太陽は、曇るともなく輝きを失つて行く。四時を過ぎれば、もう夕方だ。弱々しい日が遠い山の端にかゝる。日が落ちて、西の空は夕ばえが一きは美しい。垣根に咲殘つた二三りんのコスモスの花が、夕やみにかすかに浮いて見える。

どこかで、たき火のにほひがする。やがて、あたりはやみに包まれて行く。

第九　大演習

（一）

ぱか〳〵〳〵と、馬のひづめの音がして來たと思ふと、騎兵の一隊が、勇ましく私たちの前を通り過ぎました。

湯　臺（台）　婦　團　筒

軍隊が今夜此の町を通るので、私は、おかあさんに連れられて、夕方から湯茶接待所へ手傳ひに來たのでした。

やがて、又ごう〳〵とすさまじい音を立てて、數臺の戰車が來ました。ものすごい地ひゞきに驚いて、町の人々は皆飛出して來ました。續いて歩兵が近づいて來ました。

ちやうど接待所の前で、隊長が、「二十分間きうけい。」と號令をかけました。兵隊さんは、やれ嬉しやとばかり、私たちの前へ押しかけて來ました。

「どくらうさま。お疲れでせう。」

といたはりながら、在郷軍人や、婦人會や、女子青年團の人々が、並んで麥湯をついで上げて居ます。ほこりと汗で眞黒になつた兵隊さんが、「此の水筒にも入れて下さい。」「これにも。」「これにも。」と出されるので、私たちは、いそがしくて目がまはるやうです。

かうして、後から後から來る兵隊さんを迎へて、

統　擊　觀　　帥　敬

とう〳〵夜の十一時頃まで働きました。

（二）

夜の明けぬ中から、北の方で銃聲が聞えました。私たち女子の組も、先生に連れられて、大演習の拜觀に出かけました。

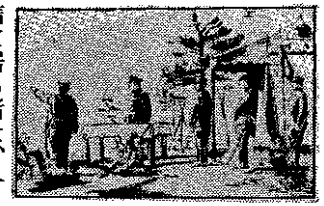
飛行機が勇ましい音を立てて、數臺飛んで來ました。時々、耳をつんざくやうな大砲の音がします。其の度に、早く飛んで行つて見たいやうな氣がしました。

今朝は霜がたくさん下りて、寒い北風がびゆうびゆう吹いて居ます。拜觀に來た人々は、皆外たうのえりに首をうづめて居ました。中には、たき火にあたつて居る人もありました。

野外統監部を遠く望む所で、私たちは拜觀して居ましたが、どこで大砲をうつて居るのかわかりません。たゞ歩兵が木の小枝や藁をせおつて、土手のかげをかけて行くのを見ました、騎兵が土をけつて走るのを見ました。戰の樣子は一向わかりません。

やがて、野外統監部へ天皇旗をお進めになつて、御統監の大元帥陛下がお出ましになりました。最敬禮をしてから仰ぎ見ますと、風當りの最も強い

況　熱　　乾



高地でありながら、陛下は外たうをも召されず、熱心に戰況をごらんになつていらつしやいます。それを拜した時、私たちは何ともいはれぬ感じがして、目が涙で一ぱいになりました。

拜觀の人々も、今は外たうを着て居る者は、一人もありませんでした。たき火も何時の間にか消えて居ました。

（三）

今日は、兵隊さんが私の家にも泊るといふので、急いで學校から歸つて來ました。すると、もう兵隊さんは來て居て、兵器の手入をすまし、靴下を洗つたり、靴をみがいたりして居ました。

お湯から上つて、「生きかへつたやうだ。」と言つて居る兵隊さん、其のそばで、銃や劍を見せてもらつて大喜の弟、夕飯の支度にいそがしいおかあさん。私も、兵隊さんの靴下を火にあぶつて、乾かして上げました。

夕食後、兵隊さんから、新しい兵器についておもしろいお話を聞きました。おとうさんも感心して、

握　盛　絹

おつしやつた。皆は一せいに掘りにかゝる。僕は、割合にしつかりしてゐる一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。やはらかい黒い土が、むく〳〵盛上つたと思ふと、四方へくづれる。中からみづ〳〵しい白茶色の玉が、じゆずつなぎになつて、ころ〳〵と出て來た。大人の握りこぶし程の大きさのもあれば、雀の卵ぐらゐな、かはいらしいのもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。隣では、莖がくさつて引抜けないのを、星野君が根氣よく掘つて、掘つたいもを一つ一つていねいに並べて行く。

あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、嬉しさうな聲。

ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ來て、おもしろさうに、僕等の仕事を見ていらつしやつた。

第十五　晴間

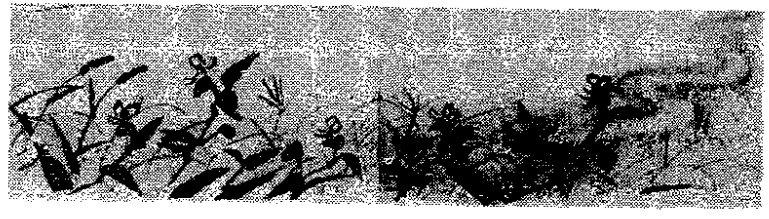
濁　田

さみだれの晴間うれしく、
野に立てば
野は輝きて、
白雲を
通す日影に、
はや夏の暑さをおぼゆ。

行く水は少し濁れど、
せゝらぎの
音もまさりて、
よろこびを
歌ふが如く、
行く我を迎ふる如し。

田園のつゞく限りは、
植ゑわたす
早苗のみどり。
山遠く
心はるゝ〳〵。
天地の大いなるかな。

ふと見れば、道のほとりに、
つゝましき



恩　軍　祖口　改

姿を見せて、
濃き瑠璃の
色あざやかに、
咲くものは露草の花。

第十六　三日月の影

重代の冑

甚次郎は、兄に呼ばれて座敷へ行つた。見れば、母もそこにゐた。床の間には、すばらしく大きな鹿の角と三日月の前立との附いた冑がかざつてある。兄は、改つた口調で言つた。

「甚次郎、此の冑は祖先傳來の寶、これをお前にゆづる。十歳の時、軍に出て敵の首を取つた程強いお前のことだ。どうかりつぱな武士になり、家の名をあげてくれ。」

甚次郎は、胸がこみ上げるやうに嬉しかつた。

「ありがたく頂戴いたします。」

と言つて頭を下げた。母はそばから言つた。

「それにつけて、御主君尼子家の御恩を忘れまいぞ。尼子家の御威光は、昔にひきかへておとろへるばかり、それをよいことにして、敵の毛利がだん〳〵攻寄せて來る。成人したら、一日

興　武者

も早く毛利を討つて、御威光を昔に返しておくれ。」

甚次郎の目は、何時の間にか涙で光つてゐた。

甚次郎は、此の日から山中鹿介幸盛と名乘り、心にかたく主家を興すことをちかつた。さうして、山の端にかゝる三日月を仰いでは、

「願はくは、我に七難八苦を與へ給へ。」

と祈つた。

一騎討

數年は過ぎた。尼子の本城である出雲の富田城は、其の頃毛利軍に圍まれてゐた。

鹿介は、戰つてしば〳〵手がらを立てた。彼の勇名は、味方のみか、もう敵方にも知れ渡つてゐた。

敵方に、品川大膳といふ荒武者がゐた。彼は、鹿介を好き相手とつけねらつた。名を桂木狼介勝盛と改め、折もあらば鹿介を討取らうと思つた。

欲　覺

んや人に頼まれたりしてはならないものです。そんな事をするやうでは、結局人情や欲に目がくらんで、ほんたうにりつぱな人物に投票するといふ精神に反することになる。これは大事なことだから、よく覺えておきなさい。」

其の時、外から歸つた母が、二階へ上つて來た。

「たゞ今歸りました。」

「やあ、お歸り。」

「お歸りなさい。」

と、僕も言つた。母は號外をちらと見て、

「まあ、當選の號外ですの。今度は、みんなりつぱな方ばかりのやうですね。」

「うん。割合うまくいつてゐる。」

「此の前、とかくのうはさのあつた人は、一人もはいつてゐませんね。」

「あゝいふ連中が今度も出るやうでは、選擧もおしまひだよ。何よりも棄權者が非常に少い。選擧人の自覺の現れだね。」

掲示

「あなたのやうに、旅行先から、わざ〳〵歸つて投票なさる方もあるのですから。」

父は、ちよつと頭をかいて笑つた。

「いや、もつともつと感心なのがあつたよ。中風で、足もろく〳〵立たないおぢいさんが、おばあさんや、若い人たちに連れられて行つてゐるのを見て、わたしは思はず涙が出た。」

「ほんたうに感心ですね。」

「あゝいふ風に、みんなが選擧の義務といふことを強く感じれば、選擧は自然眞劍になる。今度は其の眞劍のたまものだ。」

夕方、父と町を散歩した時、掲示板に、當選者の名前が大きく書いて張つてあつた。當選した家では、定めて喜んでゐることであらう。

「選擧もうまくいつた。何だか降續いた雨でも、すつかり晴上つたやうな氣がする。」

と、父がひとり言のやうに言つた。

第二十三　春淺し

沈默の冬は去れり。しかも春なほ甚だ淺し。

霜はとく消えて、表面のみかさ〳〵と乾ける地面より、早くも水仙・ヒヤシンスの芽の出でたる

増　雲　清　未　梅　衰　紀　驅

を見る。其のみづ〳〵しき緑よ。ばら・楓等の芽も、少しく紅の色を増せり。

空はなほ冬と異ならず。さえたる青空に、小さく斷續せる白雲、おもむろに西より東に向かひて移動す。風寒く、天地清明にして靜かなり。時に、大工の振るふ槌の音の遠く響くを聞く。

梅は未だ咲かず。蕾おしなべて固し。されど、南を受けたる崖下など、たま〳〵白梅の數輪咲きそめたるを見る。

冬の衰へはすでにあとを絶てり。新鮮の氣天地にひそむ。

朝夕立ちこむるうすもやに、うたゝ春のかすみを思ふこと切なり。

第二十四　熊野紀行

那智

那智驛より、自動車を驅つて那智山に向かふ。山腹に車をすて、石段の幾曲折をあへぎあへぎ上れば、白衣の遍路、御詠歌を唱へつゝ下り來るに會ふ。

境　内　校　西　美　言　材　貯

熊野那智神社に參拜す。後に面を轉じて前方熊野なだを望み、境内さして廣からねど、ぐまなくはき清められて、いと神々し。社殿の右手に、幾百年を經たりと思はるゝ楠の老木あり。枝葉空をおほひて、神域に一段の森嚴を加ふ。

玉垣一つをへだてて相隣するは、青岸渡寺なり。古來那智觀音の名によりて名高く、西國第一番の札所なり。

寺門を出で、こけむしたる坂道を下りて、那智の瀧の正面に立つ。仰げば、百數十米の中空より落來る瀧、初は水筋通りて見ゆれども、岩に當り石に碎け、下は漠々として雲の如く綿の如く、美觀言語に盡くし難し。

新宮

那智山を去つて、新宮市に至る。熊野川の川口に近く、幾十萬本とも知らぬ材木を浮かべたる大貯木場あり。附近には大小の製材工場多く、さすがに木材の集散地たるを思はしむ。

目録

第一課　農業……一
第二課　堀田瑞松……四
第三課　月の光……八
第四課　鎮守に詣でて……十
第五課　社會奉仕の精神……十二
第六課　鹽鹵の目と腕……十七
第七課　猫の垣巡……二十四
第八課　ビスマークの幼時……三十
第九課　鯨釣……三十六
第十課　保險……四十四
第十一課　人を紹介する手紙……四十九
第十二課　エジプトの遺蹟……五十
第十三課　マルコ、ポーロ……五十五
第十四課　植物と氣象……六十一
第十五課　俳句……六十五
第十六課　年頭の十日……六十六
第十七課　都會と田舍……七十二
第十八課　上毛の三山……七十五
第十九課　ペートル大帝……七十九
第二十課　警察と國民……八十五
第二十一課　かんにん……八十八
第二十二課　村上義光……九十
第二十三課　海苔……九十六
第二十四課　福澤諭吉……百五
第二十五課　人形を贈る……百九
第二十六課　故郷の花……百十二
第二十七課　鳥の巣と昆蟲の翅……百十六
第二十八課　奉天附近の大會戰……百十九
第二十九課　學校園……百二十九
第三十課　國史に遷し……百三十二

高等小學讀本　卷二　一般用

大正15

第一課　農業

農業はあらゆる職業の中で、最も身體を健康にするものである。世の中には、日の目も見ずに仕事場で働く者もあれば、一歩も机邊を離れないで、事務に忙殺される者もあるが、農業に從事する者は、終日すがくしい大氣を吸ひ、快い日光を浴びながら勞働する。人世に於てこれほど人の健康に適する職業が他にあるであらうか。

身體の健康に適する農業は、又よく精神を健全にする。

12

目録

第一課　昭憲皇太后御歌……一
第二課　太田道灌……四
第三課　ボナ……八
第四課　蒔かぬ種は生えぬ……十二
第五課　盤珪禪師……十六
第六課　野火止の用水……十八
第七課　洞庭湖……二十二
第八課　契約……二十六
第九課　山村……三十
第十課　人を問旋する手紙……三十八
第十一課　笑話……四十
第十二課　フェルディナンド、マゼラン……四十一
第十三課　眞の知己……五十一
第十四課　西洋紙の製造……五十五
第十五課　海の朝……五十九
第十六課　征夷上逐……六十一
第十七課　頼山陽……六十六
第十八課　象狩……六十九
第十九課　南洋の珍果……七十三
第二十課　網引……八十
第二十一課　廣瀬武夫の手紙……八十三
第二十二課　漁船歸る……八十六
第二十三課　かぶと蟲……九十二
第二十四課　ネバルタ武士……九十七
第二十五課　統計……百三
第二十六課　筏流し……百十
第二十七課　瀧澤馬琴の苦心……百十五
第二十八課　やまあらし……百二十一
第二十九課　足柄山……百二十五
第三十課　故郷……百二十七

高等小學讀本　卷一

一般用　大正14年

第一課　昭憲皇太后御歌

人知れず思ふ心のよしあしも
　照らし分くらん天地の神

怠りて磨かざりせば光ある
　玉も瓦にひとしからまし

日の本のさかひ離れてゆく船に

13

目録

第一課　春晴千里……一
第二課　五百羅漢の畫幅……七
第三課　文字……十一
第四課　鳥の聲……十七
第五課　感情……二十一
第六課　ペスタロッチ……二十五
第七課　川柳……三十三
第八課　噴油……三十四
第九課　旅行先より先輩へ……四十二
第十課　ナポレオン……四十四
第十一課　空の景色……五十八
第十二課　望遠鏡と顯微鏡……六十二
第十三課　バクテリヤ……六十六
第十四課　阿閉撫部……七十
第十五課　租稅……七十四
第十六課　水と風景……七十九
第十七課　天然記念物……八十一
第十八課　由利八郎の意氣……八十八
第十九課　夏の曉……九十三
第二十課　中吉の誠實……九十六
第二十一課　夕立雲……百一
第二十二課　會社……百七
第二十三課　逗子だより……百十一
第二十四課　地震……百十七
第二十五課　日本の風土……百二十四
第二十六課　ビクトリヤ女帝……百二十八
第二十七課　罐詰……百三十二
第二十八課　落日……百三十七
第二十九課　待賢門の戰……百三十八
第三十課　興國の民……百四十三

高等小學讀本　卷三

第一課　春晴千里

一

春晴千里、山又山、水又水。近き水は澄みて山の綠を浮かべ、遠き山は霞みて水に藍を流す。東京を發せし我が汽車は、此の間に一線を引きて、今や東海道を下りつゝあり。海に面して窓に倚る客、筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、そもく繪か。

七砲臺（品川舊砲臺）邊波穩やかにして、高く低く群飛ぶ鷗、落花の風にひるがへるに似たり。帆を半ば張りて出で行く

目錄

第一課　讀書……一
第二課　干潟の舟……六
第三課　すゝき原……九
第四課　蓑蟲……十
第五課　渡り鳥……十四
第六課　伊藤博文……二十一
第七課　古社寺と國寶……二十八
第八課　萬里の長城……三十一
第九課　東西雜話……三十四
第十課　資本……四十一
第十一課　ハワイ通信……四十三
第十二課　柳生宗矩……五十三
第十三課　雪……五十八
第十四課　賢母の教……六十二
第十五課　詠史十首……七十三
第十六課　ポアソナード君の歸國を送る詞……七十六
第十七課　法律及び命令……七十九
第十八課　道德と法律……八十二
第十九課　田園の自然……八十六
第二十課　我が家……八十八
第二十一課　春を待つ歌……九十四
第二十二課　世界の航路……九十六
第二十三課　手紙の認め方……百三
第二十四課　歐米人の日本人觀……百七
第二十五課　ローマの舊都……百十一
第二十六課　大樹……百十九
第二十七課　關稅……百二十三
第二十八課　曾國藩……百二十六
第二十九課　峠の茶屋……百三十
第三十課　國語と愛國心……百三十七

高等小學讀本　卷四

一般用　大正十年

第一課　讀書

我等は何のために學校に學ぶか。いふまでもなく智能を啓發し、德器を成就するがためである。然らば學校を卒業すれば、我等の智德は十分であるか。否々、學問には際限がない。學校で學ぶ知識は九牛の一毛にも過ぎない。至善至德の域に達するのは、畢生の力を盡くしても及び難い。學校は智德の基礎を造る處に過ぎないから、我等は一生を通じて修養に力め、其の大成を期せねばならぬ。

明治33年

文部省檢定濟

株式會社普及舍編輯所編

國語讀本

尋常小學校
兒童用

東京　株式會社普及舍

八。

ぬ　を　け　む

たねをまく。

みづをかける。

つるがからむ。

れ　は　あ

きれいな

はなが、

さきました。

まあ、

うつくしいこと。

戦場　我生　汝　起孝行

第一　楠木正行 (一)

楠木正行ハ正成ノ子ニシテ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。正成ノ戰死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トトモニ戰場ニ出デントセシガ、正成ハ道ニテサトスヤウ、

「我聞ク、シヽハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。ナンヂハ年スデニ十歳ヲコエタリ。ヨク父ノ言フコトヲ聞分ケヨ。コノ度ノ戰、敵ハ大ゼイニシテ、味方ハ小ゼイナリ。我ガ生キテフタヽビ汝ヲ見ンコトハカタカルベシ。我ガ死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ殘リテアル間ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。汝ノ孝行コレニスギタルコトナシ。」

室　大人　賊　教　居氏万

ト、ネンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。正成ハタシテ戰死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。正行ハコレヲ見テ、カナシサノアマリ、ツト立チテ別室ニ行キタリ。母アヤシミテ、ソノ室ヲウカヾフニ、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ拔キテ、今ニモハラヲ切ラントス。母ハ走リヨリテ、正行ノウデヲオサヘ、

「汝ヲサナクトモ、父ノ子ナレバ、コレホドノワケノ分ラヌコトハアルマジ。ヨク〳〵考ヘ見ヨ。父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。ミヅカラ御コトバヲウケタマハリ來リテ我ニツゲタルヲ、汝ハ早クモワスレタルカ。カクテハ君ノ御用ニ立ツベシトモオボエズ。」

トテ、泣ク〳〵イマシメタリ、正行大イニカンジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスルヽコトナカリキ。

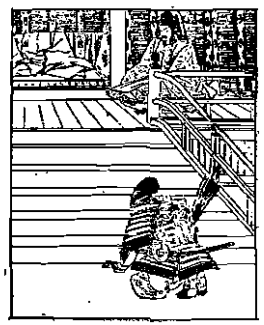
第二　楠木正行 (二)

正成戰死シテ後ハ、敵ノイキホヒマス〳〵強ク、天皇ハ吉野山ノカリノ皇居ニウツリタマヘリ。楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戰ヒシガ、アル年敵ノ大將高師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來リ攻ム。正行コノ度ハサイゴノ合

臣　朝　及不　纐　召　親代退

戰セントテ、皇居ニマキリテ申シ上グルヤウ、

「父正成ノ戰死セシ時、臣ハワヅカニ十一歳、父ハ臣ヲ合戰ノ場ニモトモナハズ、『殘リタル一門ノモノドモヲ集メテ、朝敵ヲホロボセ。』ト申シ殘シタリ。シカルニ正行スデニ男盛リニ及ベリ。モシ病ニカヽリテ早ク死ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナリ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベシ。コノ度ノ合戰ニハ、師直ラノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラガクビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、今一度天顔ヲヲガミテマキリタシ。」



族　民　桑　桑　動　末

ト、涙ナガラニ申シ上ゲタリ。天皇ハコレヲ聞キ、ミスヲ高クマキ上ゲサセ、正行ヲ近ク召シタマヒテ、

「親子二代相ツヾイテノ忠義カンズルニアマリアリ。コノ度ノ合戰サダメテナンギナルベケレド、進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ。フカク汝ヲタノミニ思フゾ。」

トオホセ出サレタリ。正行ハソレヨリ戰場ニ向ヒ、花々シク戰ヒテ、一族ノ人々トトモニ戰死ヲトゲタリ。コレ正成戰死ノ後十三年目ニシテ、正行ガ二十三歳ノ時ナリキ。正行ノ如キハマコトニ忠孝二ツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、國民ノ手本トイフベシ。

第三　あなかの四季

(一)

道をはさんで畠一面に、
　麥はほが出る、桑は花盛り。
眠る蝶々、とび立つひばり、
　吹くや春風たもとも輕く、
あちらこちらに桑つむをとめ、
　日まし〳〵にはるども太る。

(二)

ならぶすげがさ涼しいこゑで、
　歌ひながらにうゑ行くさなへ。
ながい夏の日いつしか暮れて、
　うゑる手先に月かげ動く。
かへる道々あと見かへれば、
　葉末々々に夜つゆが光る。

祭　家内　降　問答　賣　現　直段　卸　屋　口　事

(三)

二百十日も事なくすんで、
　村の祭のたいこがひゞく。
稲は實がいる、日よりはつゞく、
　刈つて、ひろげて、日にかわかして、
米になして、俵につめて、
　家内そろつて、ゑ顔にゑ顔。

(四)

松を火にたくゐろりのそばで、
　夜はよもやま話がはずむ。
母がてぎはの大こんなます、
　これがゐなかの年こしざかな。
たなのもちひくねずみの音も、
　ふけてのきばに雪降積る。

第四　商業問答

商賣上でげんきんといひ、かけといふのは何の事ですか。

品物と引きかへに代金を受取るのが現金で、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけです。

かけとかけねとは同じですか。

それは全くちがひます。ねぎられたら引く積りで、高くいふ直段がかけねです。たとへば十五錢で賣つてよいものを二十錢といふやうなものです。正直な商人はかけねなどはいひません。

小賣と卸賣とはどうちがひますか。

小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。小賣をする商人を小賣商人といひます。卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、卸賣をするものを卸賣商人といひます。

問屋といふのは何の事ですか。

問屋といふのは他人からたのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にたのまれて、それをほかへ賣渡してやり、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。しかし卸賣商人で、問屋をしてゐる場合がたくさんあります。

第五　問合の手紙

急に商用が出來て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。用事は四五

急　宿　存　節　西洋　願　類　藤　親　安　似

日ですむはずですが、十日ばかりはあちらに居ます。急ぎますのでうかゞひませんが、何かあちらでとゝのへて來る物がございますなら、御ゑんりよなくおつしやつて下さい。宿はいつもの所です。

五月一日　　高橋忠一

鈴木愛吉様

同じくへんじ

ぶじお着のことと存じます。このよい時節に東京へお上りはおうらやましい事でございます。おほせにあまえて申し上げますが、種物屋から西洋西瓜の種を三色ばかり買つて來ていたゞきたうございます。西洋西瓜には色々あるさうでございますが、なるべく大きくてうまい實のなるやうなのお願ひ申します。又母がかねゞ〳〵めづらしい草花をほしい〳〵と申して居りますから、おてかずでも、これも二三種買つて來ていたゞきたうございます。花の種類は何でもよろしうございます。

五月四日　　鈴木愛吉

高橋忠一様

第六　豆の一族

にはの藤の花が咲いて、風が吹く度にむらさきのふさが動いてゐる。畠のゑんどうがかきの外からこゑをかけて、

「とくに申し上げようと思つてゐました。あなたと私は親類ださうでございますから、どうかこれからお心安く願ひます。」

といふ。藤は

「私はちつとも存じませんでした。どういふわけで、おたがひに親類の間がらでございますか。」

と問へば、ゑんどうのいふに、

「あなたと私は大そう以てゐるではありませんか。第一あなたにも私にも